

自在原稿用紙 (40字×40行)

無関心な私の世界

私の学校の教室は不思議な造りをしている。

教室の廊下側の壁に大きな窓がついていて、廊下から教室の様子を容易に覗けるのだ。当然、教室の中から廊下を見ることも可能なため、私は授業中にぼんやりと廊下を眺めることだってできる。

しかし、こうして廊下を観察してみると、授業中の教室の前というのは意外に多くの人が行き交っていることが分かる。

清掃中の用務員さん、授業のない先生、授業の移動中なのかサボっているのかわからない生徒、実に多種多様だ。

ぼんやりとした人間観察を続ける内に、私はあることに気がついた。

廊下を通り過ぎる人がこちらの教室の中を一瞥する時、みんな似たような目をしているのだ。眺めているようで、どこか無関心な目。

私はあの目を知っている。絶対にどこかで見たことがある。どこだっただろうか。考えた末、私はついに思い出した。

動物園だ。あの目は動物園で、檻の中の動物を眺める目に似ている。

さすがに動物園にいる人ほど愉快そうな目ではないが、目に宿る感情と性質は同じだと感じた。

自分には関係のない社会を見つめる目。

しかし、そんな目をするのも無理ないだろう。私自身も母校を眺める時、そんな目をしている気がする。

かつての校庭を、名前も知らない後輩たちが走り回っている。

楽しそうに笑い合う彼らに昔の自分を重ねながら、それでも彼らに何の感情も湧かなかった。ただただ、興味が持てなかった。きつと教室も同じだ。

教室というのはその内側にいると、それがれっきとした一つの世界であることがよく分かる。

誰が賢くて、誰が人気者で、誰と誰が仲良しなのか。情報は絡まり合いながら複雑化し、それらが教室の形を成している。

しかも、それらの情勢は日々変化しているのだ。これを世界と呼ばずして、なんと呼べばいいのだろうか。

しかし、いかに教室が一つの世界であっても、その大きさが六十四平方メートルであることには変わらない。

外から見てしまえば、教室は自分とは関係のない小さな世界、それこそ動物園の一角のようちちっぽけに見えるだろう。

その中にどんな人間関係があり、感情があり、社会があったとしても、その檻の前を通り過ぎる人にとっては何の意味も持たない。

まるでサル山のように。きつと中のサルが死んでいたって、通り過ぎる人は若干のシヨックを覚えるだけで、そこまで気に留めないだろう。

なら私は？

廊下側から見ただけで、ちっぽけに変わってしまうような世界。

様々な感情と、変化する情報で形作られている世界。

自在原稿用紙 (40字×40行)

そんな世界の中で必死にもがく私も、ちっぽけな愚か者なのだろうか。
考える。しかし分からない。分かるはずがない。世界の中にいながら、世界の中に居る
自分を客観視することなどできるわけがない。私は所詮、無関心な世界の内側の住人なの
だ。
できないまま、分からないまま、私は今日も小さな世界の一席に座り、ぼんやりと廊下
を眺めている。